

別科生および JIST による 協働学習の効果と課題

田 渕 敬 光*

キーワード：協働学習、国際交流、異文化理解、別科生、JIST

1. はじめに

2020 年から続く新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大により、城西大学別科（以下、別科とする）では 2020 年度中はほぼすべての授業がオンラインに、2021 年度は基本的には対面であるが、重症化リスクのある基礎疾患を持つ学生等はオンラインによる受講（リアルタイム・ハイブリッド授業）となった。このような事態となったことで、これまで対面で実施してきた日本人学生とのコミュニケーションの場を別科生に提供することが非常に難しい状況となってしまった。このようなコミュニケーション機会の喪失は別科生だけでなく日本人学生においても同様であった。本学国際教育センターによると留学生が入国できない状態が続いていたため、JIST¹の活動がほとんどできていないとのことであった。

このような背景から、JIST にとっては異文化理解と国際交流の機会として、別科生にとってはそれまで学んできた日本語を披露する機会として、別科生と JIST のメンバーとで行う協働学習を実施することとなった。2020 年度は参加者 46 名で 2020 年 11 月 26 日と 12 月 10 日の 2 回にわたりオンライン・ピア・ラーニングと称して Web 会議サービスの「zoom」を使用した協働学習を実施した。そして、2021 年度は 11 月 25 日に参加者 20 名と小規模ではあるが、念願の対面による協働学習を実施することができた。

このような、異文化間の協働学習、すなわち、日本人学生と留学生との異文化接触に関する研究はこれまでもいくつかあり、例えば、神谷・中川（2007）では、その活動の効果として、日本人学生と留学生とが形成していった信頼関係が、活動を高次の活動へとつなげていく活動の連鎖を可能にする原動力となっている点をあげている²。これ

* 城西大学別科助教

1 Josai International Supporters' Team の略称。国際教育センターが運営する城西大学の国際交流をサポートする学生ボランティアグループ。

に関しては、藤森（2010）が日本語教材研究の協働作業を通して日本人学生と留学生の間で生じた、相手への新たな気づきと自己の役割の自覚、それによって新たな教材制作活動へと創造が継続していくとの指摘³にもあるように、自らが次の活動へ向けて意欲的に行動するようになるといった効果があることは既に明らかになっている。

本稿においても、このような協働学習の効果を2020年度と2021年度の活動を通して検証し、有用性と課題について考察することとする。これにより、今後の学内における国際交流のあり方を示唆するものを見出したい。

2. 2020年度の協働学習

ここでは2020年度に2回にわたって行った協働学習の実施の流れについてみていくこととする。

2-1. 実施に向けた下準備

別科生とJISTとの協働学習を実施することが決まった際に、オンラインで実施するにあたり、どのようなことができるかを検討した。まず、使用するツールについてであるが、本学ではオンライン授業においては「Microsoft teams」と「zoom」が主流であった。そのため、この協働学習においてもどちらかを使用することとしたが、別科においてはすべてのオンライン授業でzoomを使用していたため、操作に不慣れなMicrosoft teamsとしてしまうと、別科生は日本語運用能力がそれほど高くない上に操作も十分に理解していない学生が多く参加することになってしまう。したがって、当時、JISTのメンバーの中には不慣れな学生もいたかもしれないがzoomを使用することとした。zoomにはブレイクアウトルームという機能がある。これは、メインルームとブレイクアウトルームを活用することで複数のグループセッションおよびグループ間の移動が可能であるため、この機能をベースに実施することとした。

次に、実施方法であるが、2020年度の参加者は先述したとおり46名だが、内訳は別科生22名、JIST14名、有志10名であった。そこで、7名のグループ2つと8名のグループ4つの計6（A～F）グループを作り、できるだけ国籍等の偏りが出ないように振り分けた。これによりグループ活動（ピア・ラーニング）ができることとなった。また、1回目の活動では終わらない場合を想定してWebClassにコースを作り、各グループがチャットでコミュニケーションがとれるようチャットルームを設置しておいた。

2 神谷順子・中川かず子（2007）「異文化接触による相互の意識変容に関する研究：留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果」『北海学園大学学園論集』第134号 pp.1-17

3 藤森弘子（2010）「高度専門職業人養成課程における日本人学生と留学生の協働作業及びピア評価の試み」『日本語教育』144号 pp.73-84

2-2. 実施内容（第1回：ディスカッション）

11月26日（第1回）に実施する活動内容は、2018年に別科の日本文化ゼミナール（田淵）と経済学部1年生のフレッシュマンセミナー（李）とのコラボゼミを実施した際に行ったグループディスカッションをもとに作成した課題解決型・自由討論型・ディベート型のテーマから1つ選んで行うグループディスカッションを主軸とした活動を行うこととした。当日の流れであるが、1回目は80分という限られた時間内に存分に活動してもらうため、できるだけタイトな時間配分とした。まず、別科長・国際教育センター事務長挨拶、趣旨説明を10分程度行い、次にグループ分け⁴で5分、そして、グループに分かれた段階で時間短縮のための偏愛マップによる自己紹介をさせた。なお、これだけでかなりの時間を要してしまったため、活動時間は短いグループで45分程度しか残されていなかった。ディスカッションの進行方法やディスカッションテーマに関しては、以下のような資料を事前に学生に配布し、これをもとにディスカッションを進行させた。

図1. ディスカッション用配布資料

ディスカッションの前に

①役割を決める ※1名以上、別科の学生を入れてください

司会者
書記（1～2名）
発表者（1～2名）

②テーマを決める ※1つ選んでください

課題解決型：「言葉がわからない国で300万円稼ぐ方法（言葉の勉強禁止）」

自由討論型：「各国の様々なモノやサービスの価格の違いと原因」

ディベート型：「ペットを飼うなら犬がいいか猫がいいか」

課題解決型ディスカッションの進め方

注意：他の人の話は最後まで聞きましょう

①選んだテーマの課題点を考える

- ① 1人2個ずつ課題だと思ふことを話す
- ② 発言を書き出し、内容の整理をする（例：10個→5個に絞る）
- ③ 整理された課題を書き出す

②課題の解決策を考える

- ① 各課題に対する解決策を1人1個ずつ考えて話す
- ② 発言の内容の整理をする
- ③ 整理された課題を書き出す
- ④ 解決策の優先順位を考える

順位は👉を参考にする

 - ・インパクト：解決策がもたらす効果
 - ・実現可能性：解決策のリスク・コスト
 - ・オリジナリティ：解決策の独自性

4 あらかじめ、誰がどのグループとなるかは教員側で決めていたが、メインルームからブレイクアウトルームへの振り分けにかなり手間取ったため5分かかった。

自由討論型ディスカッションの進め方

注意：他の人の話は最後まで聞きましょう

①選んだテーマについて調べる

- ①何について調べるかを複数決める（タクシーや生活用品の値段など）
- ②1人2〜3個ずつ分かった事実を話す
- ③発言を記録し、内容を比較する

②物価に違いがある原因を考える

- ①各国の経済状況を調べる（「世界経済のネタ帳」がおすすめ）
- ②経済状況とそのモノの物価の関係を考える
- ③物価に違いがある原因を整理する
- ④調べた過程を書き出す

ディベート型ディスカッションの進め方

注意：他の人の話は最後まで聞きましょう

①選んだテーマについて考える

- ①それぞれのメリットとデメリットを考える（1人2〜3個）
- ②発言を書き出し、内容を整理する（同じものは消すなど）
- ③整理した内容を書き出す

②相対的にどちらがよいかを考える

- ①自分が考えたメリットとデメリットについて説明する
- ②どちらのメリットが多いor強いか話し合う
- ③デメリットは解決できるかどうかを話し合う
- ④結論（どちらがよいか）を出す

教員側はディスカッションの進行中に自由にブレイクアウトルームに入出りができるようにしており、一度に俯瞰することはできないが、各グループの進捗状況を確認することができた。そのため、進行がうまくいっていないグループに対してはできるだけ思考が固定されてしまわないよう気を付けながらアドバイスすることによりディスカッションを促すことができた。

各グループが選んだテーマは、かなり偏ってしまい、Bグループが「各国の様々なモノやサービスの価格の違いと現状」をテーマとした以外はすべて「ペットを飼うなら犬がいいか猫がいいか」を選択していた。80分授業であったため、すぐに終了の時刻が来てしまったが、この時点である程度内容がまとまっていたグループは2組ほどであった。そのため、連絡先などの交換を促し、次回の発表会までにまとめるよう指示して解散とした。発表資料にあたっては以下のような指示をテーマ毎に出した。

図 2. 発表準備用配布資料

発表資料の作成手順(自由討論型の場合)

① ディスカッションの内容を整理する

- ① そのテーマを選んだ過程 (理由)
- ② そのモノ・サービスを選んだ過程 (理由)
- ③ 調査の結果
- ④ 価格の違いの原因と議論の過程

② 自 G のディスカッションを評価する

- ① 良かった点・悪かった点
- ② 評価点 (?/100点)

発表資料の作成手順(ディベート型の場合)

① ディスカッションの内容を整理する

- ① そのテーマを選んだ過程 (理由)
- ② それぞれのメリット・デメリットの解説 (理由)
- ③ デメリットの解決策
- ④ 結論と理由

② 自 G のディスカッションを評価する

- ① 良かった点・悪かった点
- ② 評価点 (?/100点)

なお、この際、下準備で作成した webclass のチャットルームについては 1 名だけが発言し、他は発表当日のファイルのやり取りのみで、コミュニケーションツールとして使われることはなかった。

2-3. 実施内容 (第 2 回：発表会)

ディスカッションを行った 11 月 26 日から 2 週間後の 12 月 10 日に 2 回目の活動として発表会を実施した。A グループから順番に発表していった。先述したように B グループ以外は「ペットを飼うなら犬がいいか猫がいいか」をテーマとしていた。発表時間に関してはグループによって様々であったが概ね 5～10 分程度のものではあった。

同じテーマのグループが 5 つあるため、発表内容も同じ様なものが続いてしまわないかと危惧されたが、それぞれグループの特色を出していたため、飽きさせないものであった。各グループの発表テーマと内容 (一部) は次のとおりである。

図 3. 各グループのテーマと発表スライドの一部

【A グループ】 デイバート型：「ペットを飼うなら犬がいいか猫がいいか」

まとめ

ペットを飼うなら猫がいいという結論が導き出された。

理由について：

- 住居面での制限は小さい。
- 飼育費用はあまりかからない。

ですが、ペットなら、どちらを飼っても、気軽に旅行や外食が出来ないなど生活に制限があり、経済的にも負担があります。ペットと暮らすことは、メリット・デメリットがあることは必然です。ペットの飼育を検討している方も、すでにペットと暮らしている方も、生活環境主として「ペットと暮らす心構え」を有しておくべきだと考えます。

【B グループ】 自由討論型：「各国の様々なモノやサービスの価格の違いと原因」

グループの良かった点・悪かった点

良かった点

- それぞれの意見を言えて、それぞれの国のことを知れたこと。
- 比較的役割もすぐ決定し、スムーズに話し合いができたこと。
- みんなと仲良くなれて嬉しかった。



悪かった点

無し！逆にみんなが活躍しすぎたところ。



【C グループ】 デイバート型：「ペットを飼うなら犬がいいか猫がいいか」

犬の考え方



彼らは餌をくれて、
撫でて愛してくれる
彼らは神に違いない



彼らは餌をくれて、
撫でて愛してくれる
私は神に違いない

猫の考え方

【D グループ】 デイバート型：「ペットを飼うなら犬がいいか猫がいいか」

結論

犬も猫もいい点と悪い点がある。人によって選ぶことが違う。どちらにせよ、動物を飼ったら、ちゃんと世話をするべきだ。

【E グループ】 デイバート型：「ペットを飼うなら犬がいいか猫がいいか」

(4) 餌とか、お金をかかる。

- 始めに用意する物（ケージ・トイレ・食器等）⇒20,000～40,000円ぐらい
- ・ 食費⇒小型犬／約2,000円 大型犬／約6,000円
- ・ 美容衛生代（くし・シャンプーなど）⇒約3,000円
- ・ トリミング代⇒1回 約5,000（犬種、店によって差はある）
- ・ 狂犬病予防接種⇒年1回 約3,000円
- ・ 伝染病ワクチン代⇒飼い始めは1カ月おきに2～3回⇒1回 約5,000円



デメリットの解決方法①

- かみつく恐れがある
- 犬と信頼関係を築き、その上で子供を育てるときの様にダメな事はしつけする。
- 知り合いにも吠える
- 上記と同じ方法でしつけをする

発表は日本人学生がするグループもあれば留学生が発表するグループもあり、説明がうまくできていない場面もあったが、概ね滞りなくすべての発表を終えた。その後、zoomの投票機能を使い、各グループの学生および一般視聴者、教職員にどのグループの発表が最も良いと感じたかを問うた。その結果、唯一他グループとは違うテーマを選んだBグループが突出して得票が多かった。次点でEグループであった。Bグループは特にスライドも充実しており、発表者をスライド毎に次々に交代したにもかかわらず澁みなく進行できていた点が高く評価されたようである。

図 4. 発表会当日の様子⁵



5 発表会当日はハイブリッド型で実施したため、教室全体が俯瞰できるように 360°カメラのマイクスピーカーを使用した。

3. 2021 年度の協働学習

ここでは、2021 年度の活動についてみていくこととする。2021 年度は全学的に対面またはハイブリッド型の授業が多くなり、別科においてもほとんどの学生が対面で受講している。そのため、別科生同士のコミュニケーションは円滑に行われており、対人コミュニケーションに飢えているような状態ではなかった。しかし、日本人学生との接触はまったくなかったため、自身が学習した日本語や日本文化についての知識を披露する場を求めているようであった。

一方で、JIST は前年度に続いて新型コロナウイルス感染拡大防止措置としての入国制限により、未だ留学生が新規に入国できない状態が続いており、活動がほとんどできない状態であった。そこで、2021 年度も別科生と JIST メンバーの協働学習の場を設けることにより、双方の需要を満たそうと考えた。

3-1. 実施に向けた下準備

2021 年度の協働学習の実施にあたっては、11 月に入り、新型コロナウイルスの感染者数が大幅に減少したことを受けて対面で行うこととした。実施の規模であるが、最終的な参加人数は別科 11 名、JIST および有志が 9 名（うち日本人学生 6 名）で総勢 20 名と 2020 年度の半数以下となった。別科生（日本文化専修課程）が 11 名と非常に少なくなってしまったのは、新型コロナウイルスの影響で日本語学校からの入学者が激減してしまったことによるものである。また、JIST 側の参加者が少なくなってしまったのは、参加者の募集を始めたのが遅かったこともあるが、実施形態が対面であることに加えて実施の時間が学部等のコア科目の時間に重なっていたことが大きい。

とまれ、20 名の参加が確定したため、10 名ずつの 2 グループに分けて活動することとした。内容については、参加人数が少ないこともあり前年度のような体系的なものにするのは難しいと考え、ゲーム要素のある活動にすることとなった。別科生としては普段の学習の成果を披露する場でもあるため、語彙力や文法力、発話力が発揮できるものが良いと考え、「ワードウルフ」というゲームを中心に活動することとした。ルールがやや複雑なところがあるため、当日の説明だけでは理解ができない可能性があり、別科生のみで事前に練習をした。

3-2. 実施内容（ワードウルフ）

当日は、まず参加者 20 名を一教室に集め、前年度の経験を生かして手短かに挨拶と全体説明を行った。その後、グループ毎に二教室に分かれて活動を始めた。グループ編成は予め教員側で指定している。グループに分かれた後は一人ひとりに簡単な自己紹介を

させ、すぐにワードウルフを開始した。

図 5. 2021 年度の協働学習において当日配布した資料の一部

<h3>自己紹介について</h3> <p>③のワードウルフで、指名をする場面があります。かならず名前だけは、しっかり紹介してください。 ※ニックネームでもいいです。 ネームプレートに名前かニックネームを書いてください。</p> <p>例： 好きな食べ物、趣味、できる言語（レベル？） 将来の夢、アルバイトなど ※できるだけ短いほうがいいです。（次の活動の時間が増えます）</p>	<h3>ワードウルフについて</h3> <p>配られたことばについて話し合っ、少数派を当ててゲームです。</p> 
<h3>ワードウルフのやりかた</h3> <p>①テーブルマスター(先生)がことばが書かれたカードを配る。</p> 	<p>②配られたことばについて一人ずつコメントする。</p> 
<p>③全員一言ずつコメントし終わったら、だれが少数派(ウルフ)だと思ふかを</p> 	<p>④グループの半数以上が同じ人の名前を言うまで②～③を繰り返す。</p> 
<p>⑤ウルフが決まったら、一人ずつ自分のカードのことばを言う。</p> 	<p>⑥ウルフが本当にその人だったら多数派の勝ち。ウルフが別人だったら少数派の勝ち。</p> 

ワードウルフは、図5にも示した通り配られた語彙カードについて話し合い、少数派を見つけるゲームである。手順としては、2種類の語彙カードを用意し、一方は多数、もう一方は少数になるように予め枚数を決める。例えば10名のグループで行う場合、「みかん」と「りんご」であれば、みかんを8枚、りんごを2枚用意し、他者に見えないようにテーブルマスター（今回は教員）が各々に配布する。次に1人ずつ配布された語彙について一言ずつ説明・感想を述べていく。一巡した際に、誰が少数派だと思うか、一人ずつ指名していく。この際に半数以上が、同一人物を指していれば、その時点で各自配られた語彙を明らかにし、誰が少数派であったのかを確かめる。半数以上にならなかった場合は、もう一巡、各々の語彙についてコメントする。半数以上から指名された人物が少数派であった場合は多数派の勝ち、少数派ではなかった場合は少数派の勝ちとなる。各グループで実際に使用した語彙カードは以下のとおりである。

表1. 各グループで使用した語彙カード⁶

グループ A		グループ B	
チーズ (9)	バター (1)	チーズ (9)	バター (1)
砂糖 (8)	はちみつ (2)	砂糖 (8)	はちみつ (2)
教科書 (8)	辞書 (2)	焼肉 (6)	ステーキ (4)
ピンク (7)	赤 (3)	神奈川県 (7)	千葉県 (3)

注：カッコ内は枚数

参加者は皆、上記の手順にしっかりと従いながら少数派を探り合っていた。別科生も日本人学生に比べ、語彙力が劣る中で自身ができる最大限の表現で自らが多数派であることをアピールしていた。また、教員側は進行がスムーズに行えるよう、当該語彙の説明に詰まった学生がいた際には、説明をするためのヒントを与えて発言を促した。勝敗の結果としては、日本語能力の差による偏りもなく、留学生、日本人学生といった括りに関係なく、勝ち負けを繰り返していた。

4. JIST との協働学習における効果と課題

ここまで、2020年度と2021年度に実施した別科生とJISTとの協働学習の実施内容についてみてきたが、両年度とも学生に対する事後のアンケートやヒアリング調査は実施していない。そのため、満足度を把握することは難しいが、2020年度に参加したJISTのうち数名が2021年度にも参加していることから、少なくとも、この学生らにとっては満足のいくものであったようである。2020年度の協働学習の成果としては、

6 これ以外にもピーマン・パプリカ、ラーメン・パスタの組み合わせを用意していたが、時間の関係上使用できなかった。

別科生にとって大学等への進学を準備する段階ですでに大学等で学習・研究をしている学生と触れ合い、アカデミックなグループワークを体験することで、進学への具体的なイメージを持つことができたようである。また、進学後に他者との交流を積極的におこなう様子が見受けられた⁷。さらに、協働学習後の日本語演習等の授業における学習態度がそれまでと比べても格段に良くなったことから学習意欲の向上につながったものと思われる。また、JIST にとっては、コロナ禍において国際交流はもとより日本人同士でのコミュニケーションすら難しいなかで別科生（留学生）との協働学習というコミュニケーションの機会を得られたこと自体が成果であるといえよう。

一方で、課題としては、ディスカッションテーマの難易度に偏りがあったため、ディベート型「ペットを飼うなら犬がいいか猫がいいか」に集中してしまい、課題解決型「言葉がわからない国で300万円稼ぐ方法（言葉の勉強禁止）」は1組も選ぶことはなかった。3択にはしていたが、実質的に選択肢が一つのみといった状況を作ってしまった点は反省すべきである。また、オンラインの弱点でもあるが、各チームの進捗状況を俯瞰することができないため、フォローが行き届くまでに時間がかかってしまい、進行がスムーズにおこなえていないチームでは教員が気付くまで議論が止まってしまっている事があった。さらに、普段使用しているLINEやWeChatなどコミュニケーションツールが学生によって違うため、チームによってはその場限りとなってしまう、ディスカッションから発表までの間にチームメイトと一度も連絡を取り合うことがなかった参加者が少なからずいたようである。このような事態に備えてWebClassにチャットルームを設置したのであるが、事前の周知が不足していたためか、機能的なものなのか選好されず、ほとんど使用されなかった。教員側が事前に既存の使いやすいコミュニケーションツールを指定するなどの対策が必要であった。

2021年度の活動に関しては、前年度の反省を踏まえてゲーム性のあるものにし、敷居を低くしたことで、参加者全員が取り組みやすくなった。また、ゲームの特性上、発言機会が多くなり語彙力がものを言うものであるため、自身の語彙力の向上にもつながる。何より対面での実施が、コミュニケーションを行う上で重要な表情から相手の心情を読み取ることが容易になるといった好影響をもたらしていた。一方で、ワードウルフというゲームは、ゲーム中の発言数は多くなるが、その発言は双方向のものではなく当該語彙についての一方の発言が主である。したがって、学生間の言語的コミュニケーションが生じにくいという問題がある。また、対面であったことで参加者が集まりにくくなってしまった点も課題として残る。2021年度の活動が小規模になってしまった主要因は、実施が学部学科におけるコア科目とされる必修・選択必修科目の多い時間帯であったことが考えられる。しかし、2020年度も同じ時間帯で実施しているにもかかわらず

7 筆者は城西短期大学へ進学した元別科生の日本語の授業を担当しており、当該学生が他者との交流を積極的におこなおうとする様子が見られた。

らず、約 20 名の参加があったことをみると、気軽に参加が可能なオンラインという実施形態の強みが伺える。このように対面とオンラインという実施形態にはそれぞれの良さ悪しがあるのである。したがって、今後の活動においては、対面を基本としつつも参加者を一定数確保することが難しい場合は、オンラインあるいは対面も混在するハイブリッド型での実施を検討するなど、柔軟な対応が必要であろう。

留学生と日本人学生とで行う協働学習は、留学生がそれまで学んできた日本語を披露し、自身の日本語運用能力を確かめる場となることは勿論であるが、清田（2015）が述べているように、日本人学生にとっても非母語話者である留学生に対する自身の日本語運用能力が不足していることに気づかされるといった効果がある⁸。したがって、日本人学生と留学生の交流は、双方が自身の日本語運用能力を高めるためのまさに協働作業なのである。また、梶原（2020）にもあるように留学生と日本人学生とが接触し一時的に交流をする機会を提供したとしても交友関係を続けるのはむずかしく、自ら積極的に交友を深めるための行動をとっていない学生が多くみられる⁹。単発的な交流の機会を提供するだけでは、表層的な異文化交流はできたとしても、異文化を深く理解するには至らない。したがって、キャンパス内の国際交流をより活発なものにするためには、継続的に異文化接触の機会を提供することが求められるのである¹⁰。

5. 結び

本稿では、2020 年度と 2021 年度の別科生と JIST の協働学習の実際を紹介し、その効果と課題について考察した。例えば、活動内容を参加者が取り組みやすいものにすべきであるし、かといって、ゲーム性を高めすぎることによって学生間における言語的コミュニケーションが生まれにくいような状況を作ってしまうのは意味がない。したがって、活動の難易度とコミュニケーションツールとしての活動であるという前提とを意識しつつ、バランスの良いものを提供することが求められる。このような効果と課題には、今後のキャンパスにおける国際交流のあり方を示唆するものもあった。

新型コロナウイルスの感染拡大によりキャンパス全体でコミュニケーションが不足している現在、このような国際交流の場を提供し続けることは、キャンパスの活性化と

-
- 8 清田淳子（2015）「留学生との相互学習型活動における日本人学生の言語的調整行動と学び— 言語的共生化における「協働」の過程に注目して」『立命言語文化研究』26 卷 3 号 p.128
- 9 梶原雄（2020）「日本人学生は外国人留学生をどう見ているか 同志社大学の日本人学生からの視点」『同志社大学日本語・日本文化研究』第 17 号 pp. 107-108
- 10 別科は修業年限が 1 年間と非常に短く、この期間でじっくりと「継続的に」日本人学生との親睦を深めることは難しいが、学内進学をするという前提で見れば短期大学や大学院に進学をした場合でも別科在籍期間を含めて 3 年間ある。したがって、別科生だから交流の機会が提供できないというわけではなく、機会を 1 年の間に無理に詰め込む必要もないといえよう。

いった側面だけでなく、これまで、気軽に人と触れ合えたことにより生じていたはずの自己の変容による成長の機会を大学としてバックアップすることにもつながるのである。

参考文献

- 神谷順子・中川かず子（2007）「異文化接触による相互の意識変容に関する研究：留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果」『北海学園大学学園論集』第134号 pp.1-17
- 藤森弘子（2010）「高度専門職業人養成課程における日本人学生と留学生の協働作業及びピア評価の試み」『日本語教育』144号 pp.73-84
- 清田淳子（2015）「留学生との相互学習型活動における日本人学生の言語的調整行動と学び——言語的共生化における「協働」の過程に注目して」『立命言語文化研究』26巻3号 pp.127-150
- 梶原雄（2020）「日本人学生は外国人留学生をどう見ているか 同志社大学の日本人学生からの視点」『同志社大学日本語・日本文化研究』第17号 pp. 93-111
- 毛利貴美（2019）「Skypeによる遠隔セッションを取り入れた実践——Deep Active Learningの視点から」『ICT×日本語教育——情報通信技術を利用した日本語教育の理論と実践』當作靖彦監修・李在鎬編、ひつじ書房 pp.68-83
- ショー出口香（2019）「インターネットを活用した異文化間コミュニケーション能力育成をめざした日本語学習活動」『ICT×日本語教育——情報通信技術を利用した日本語教育の理論と実践』當作靖彦監修・李在鎬編、ひつじ書房 pp.112-136
- イノベーション・デザイン&テクノロジーズ株式会社（2019）『平成30年度「生活者としての外国人」のための日本語教室空白地域解消推進事業～ICTを活用した「生活者としての外国人」のための日本語学習コンテンツの開発・提供に関する調査研究～』平成30年度文化庁委託事業 pp.1-54